

H・ハメル『朝鮮幽囚記』に関する考察

Some notes on Hendrick Hamel's Report of 17th century Korea

環太平洋大学名誉教授

小川 隆章

OGAWA, Taka-aki

Emeritus Professor

International Pacific University

要旨：17世紀に厳しい鎖国政策を採っていた朝鮮にオランダの貿易船が漂着した。乗組員36人が抑留され、そのうち書記のヘンドリック・ハメルが朝鮮脱出後に勤務先のオランダ東インド会社に提出した報告書はオランダで出版（1669年）され、ヨーロッパに未知の国・朝鮮を知らせた。ヨーロッパ人の目から見た17世紀の朝鮮を記述した記録として貴重な資料となった（日本では『朝鮮幽囚記』、韓国では『ハメル漂流記』の書名で出版）。現在韓国ではハメルらが漂着した済州島南岸の地に記念碑、抑留生活を過ごした麗水市にハメル博物館、康津にハメル記念館が建て居る。また、一部の歴史教科書に登場している。本稿ではハメルらが朝鮮で過ごした生活の実像とハメルの報告書の記述内容から3つの問題を考察してみたい。

キーワード：ヘンドリック・ハメル、朝鮮幽囚記、オランダ貿易、朝鮮王朝

I 遭難・抑留・脱出の経過

1653年8月16日の未明、台湾から日本の長崎へ向かっていたオランダ東インド会社の貿易船デ・スペルウェル号は5日続いた暴風雨に翻弄され済州島南岸に漂着した。乗組員64名のうち生き残った者は36人だった。地元の大静県の役人たちに拘束され、済州府に護送された。当時の済州牧使・李元鎮が日本語のできる者に対応させて、日本へ向かっていた貿易船の乗組員と分かった。36人はかつて先々代の国王光海君が配流されていた建物に収容され、都からの指示を待った。都から朴延という者が来て彼らと対面すると、なんと朴延^(注1)はヤン・ヤンセ・ウェルテフレというオランダ人だった。彼は26年前、1627年にオウエルケルク号という船で朝鮮の海岸に着き、飲料水を求めてボートを出して上陸した時仲間二人とともに住民に拘束され、船は逃げ去ってしまったという。都へ連行され、帰国を希望したが、「我が国ではいったん入国した者は出国させない決まりだ」と言われ、訓練都監という国王護衛の役所の兵士とされた。1636年の満州族の後金（のちに大清と号する）が朝鮮に侵攻した戦争（韓国では丙子胡乱と呼ばれる）に兵士として戦い、仲間のオランダ人2人が戦死し、彼一人が残った。朝鮮女性と結婚、一男一女がいる。36人も都に護送され

（移動の途中で1名が死亡）、同じく訓練都監に属する兵士とされた。清国の使節が来るときは彼等の存在を憚って、南漢山城に隠したり宿舎からの外出を禁止したりしていたが、あるとき、彼等のうち2名が使節の前に飛び出して帰国を哀願して捕えられ獄死した。朝廷は使節に賄賂を贈ってもみ消しを図った。このような不祥事の再発防止のためか、33人は都から遠く離れた全羅道康津郡の全羅兵營の兵士として配属になった。やがて早魃が何年も続くと、支給される米が足りず、彼らは物乞いをして生きざるをえなかった。栄養不良や病気のため半数の仲間が死亡。全羅兵營から多少食糧事情の良い順天、麗水、南原に分散配置され1666年の時点で16人が生き残った。のちに「ハメル報告書」を書くことになるヘンドリック・ハメルと7人の仲間は、この年の8月（太陽暦では9月）、小舟を入手して日本への脱出を計画した。8名のうち日本へ行ったことのあるものは一人もいなかったそうだが、麗水出港から2日後に五島列島の小島に着いた。五島藩は彼らを保護して長崎に送った。長崎奉行の松平甚三郎は漂流を偽装したキリシタンの宣教師ではないかと厳しく吟味の上、オランダ商館に引き渡した。ここまでがハメルの報告書に記述されている経過である。残り8人の朝鮮脱出についてはまだ実現していなかった。長崎奉行所での訊問の際に奉行が

「彼等（朝鮮に残っている8人の仲間のオランダ人）はそこから当地に来られるかどうか？」

と尋ねると、

「カイゼル（江戸の将軍）が国王に手紙を書けば、彼等は私たちの所に来ることができるでしょう。というのは、将軍は毎年漂着して来る国王の国民を送り返しているのです、国王は敢えてこれを拒絶しようとはしないからです」

とハメルらは答えている。当時、日本と朝鮮はお互いの漂流民を保護して送り返す制度が機能していたことをオランダ人たちは知っていたのだ。

商館長ダニエル・シックスが江戸参府中に残留者8名の救出を幕府に訴え、幕府は対馬藩を通じて残留オランダ人の引き渡しを求めた。朝鮮の朝廷はこれを受けて、残りのオランダ人を対馬藩に引き渡し、1668年に長崎に到着、かくして約15年間の抑留を経験したオランダ人たちは本国に帰国することになった。

II 抑留されたオランダ人の中に希望して朝鮮に残留した者がいたのか？

1666年に麗水・順天にいたハメルら8人が日本へ脱出し、まだ8名が朝鮮に抑留されていることが知られ、幕府の仲介により日本への引き渡しに対馬藩を通じて行われたのであるが、残り8名のうち1名が朝鮮を出国しなかったとについて、文献によって記述が異なる。

姜在彦（1994）では「徳川幕府は、対馬藩を通じて朝鮮政府と交渉した結果、朝鮮に残りたいという1名を除外した7名が日本に引き渡された。すなわち、濟州島に漂流した36名のうち、15年後には16名が生存し、そのうち1名だけを残して15名が長崎のオランダ商館を経て本国に帰ることになったのである」とする。姜在彦（1996）でも同じである。

尹基老（2005）も「1666年、ハメルら8名は日本への脱出に成功した。ハメルらが徳川幕府に要請した結果、1668年に7名が日本に引き渡され、1名は朝鮮に残ることとなった」と述べている。

金学俊（2014）も「朝鮮に残った8名のうち、帰国を望まない1名を除く7名も、日本政府の強い要請により1668年6月、日本に引き渡された後、7月アムステルダムに到着した」と記す。

Wikipediaでも「いまだ朝鮮に滞在しているデ・スペルウェル号の生存者についても、幕府の対朝鮮外交の窓口となっていた対馬藩主の宗氏を通じて日朝間で

送還の交渉が行われ、朝鮮への残留を希望した1名を除く7名が、対馬を経由して日本へ送られ、長崎のオランダ商館に引き渡された」となっている（2018.8.1.閲覧）。

一方、申東珪（2000）は仮に1名が朝鮮に残ることを希望したとしても、朝鮮がそれを認めなかったであろうという。「朝鮮にとっても送還が決まっていたオランダ人の朝鮮残留はまた別の形での日本の介入を招く恐れがあるので、速やかにこのオランダ人に関する一件を処理しようとした朝鮮側がその1人の残留希望を許可したとは思えない。また、自ら朝鮮残留を希望したとする1人のオランダ人に関して朝鮮の資料では何の記録もない。一方、朝鮮の日本への書契と残留オランダ人の商館長への報告には1人の死亡が記録されている。」と論じ、「これまでの研究であまりはっきりしなかった残留オランダ人の問題は朝鮮への残留希望でなく、死亡と見るべきである。」と結論している。

徐賢燮（2001）も「日本側は（中略）対馬を通じて書状を朝鮮に送った。これを受けた朝鮮側はついに彼等の送還に同意し、病死していた1人を除く7名が1668年9月、漂着以来実に15年ぶりに朝鮮の地を離れたのである」とする。

筆者が残留オランダ人8名のうち、1名が死亡したため帰国できなかったのか、あるいは本人の希望で朝鮮にとどまったのか、に関心を持つのは、ハメルら一行の朝鮮での生活への適応を推察する一つの手がかりになるであろうからである。慣れない異国で不自由な生活を何年もして、いつか母国に帰りたいと願いつつ、朝鮮での生活に慣れ、いよいよ帰国できる機会が来た時に、自分はもう母国には帰らず余生を朝鮮で生きると決意したのなら、「住めば都」で長年の間に適応したといえよう。しかし、実際はそういうオランダ人は一人もいなかったことが確認される。ハメルら8名が小さな舟で長崎へ向けて危険とも思える脱出をしたのも、食べる物にさえ不自由する明るい見通しのない生活から、一縷の希望を持って命がけの冒険を試みたのではないかと思える。

江戸期の日本の場合は長崎でオランダと交易をしていたので、西洋人が日本に漂着した場合、各藩の責任で長崎へ送り届け、オランダ船によって国外へ出すようになっていた。朝鮮と同様、できるだけ日本の国情を知られぬようにしている。19世紀のことであるが、利尻島に漂着したアメリカ人ラナルド・マクドナルドは松前藩が長崎へ護送し、オランダ船を待つ間、長崎に収容され、オランダ通詞たちに英語を教えていたこと

がよく知られている（吉村1896、江越2008）。彼はもともと日本に入学してみたいと思っていたが、日本では鎖国政策を採り、密入国すれば重罪人として扱われるが、漂着した外国人は保護されることを知っていて、偽装漂着して入国したのであろう。

また、ここで思い出されるのが、豊臣秀吉による朝鮮出兵（文禄・慶長の役、韓国では壬申倭乱および丁酉再乱と呼ぶ）の際に日本に連行され抑留された朝鮮人たちの例だ。江戸期第1回から3回までの朝鮮通信使は「回答兼刷還使」と称され、日本から朝鮮人捕虜を刷還するのが使命の一つだった。被虜人たちは故国からの使節が来たと聞いて面会に来るけれど、使節の帰国に合わせて一緒に帰ろうとするものはわずかだった。多くは日本の生活に慣れ安定した生活をしていて、それを捨てて帰国するまでに至らなかった。「例えば、本国では、両班から賤視されていた陶工たちが、むしろ日本で高い評価を受けて士分として待遇され、後世に名を残している人も多い。皮肉なことに、朝鮮の日常雑器の中に陶磁の美を発見したのは、日本の茶人たちであった」（姜在彦2002, p.81-82）。鄭草植（2006）も紀州藩の侍講となった李真榮・梅溪父子、家康に仕えて出世した充福という者の例を挙げるとともに、「地獄の暮らしであるはずの敵地が心地よい住処に変わり帰国を願い出る者が減った」という。1624年（寛永元年）の通信使の記録にも「捕えられて来た人も、素手で来て数年の間に、財産があるいは数百金になり、このために人々がその生業を楽しみ、故国に帰る意がなかった」（姜弘重1988, p.71）と述べられている。

デ・スベルウェル号のオランダ人たちも一律に兵士とするのではなく、彼等の持っている技術や知識を生かす仕事を朝鮮で行えるならば、彼等も生き甲斐を持って生活できたらうし、朝鮮社会としても良かったのではないか。例えば、1666年にハメルらと一緒に麗水を脱出して長崎に着いたマテウス・エイボッケンは船医であったので、ソウルで医師として働く道はなかったかと思う。朝鮮末期・19世紀の後半、多くの西洋人が朝鮮に来て、朝鮮の医学の遅れに驚いている（金学俊, p.237, 253, 271ほか）。17世紀のオランダの医療のレベルは当時の朝鮮に役立てたのではないかと思う。これは次に取り上げる問題とも関係している。

Ⅲ 朝鮮はハメルら一行の知識・技術を受容したか

日本人の著名な朝鮮史研究者あるいはグループ（梶

村1979、朝鮮史研究会1981、武田2000、旗田2008）による朝鮮史・韓国史の通史を見るとハメルら一行の漂着事件をいずれも記述していない^(註2)。これは彼等の13～15年の滞在が朝鮮の歴史に痕跡を残さず、後世に影響を及ぼさなかったことを示唆しているように見える。韓国の小学校歴史教科書に出てくるハメル一行について見ると、18世紀の実学思想（実学者たちが漢訳西洋書を読み西洋文化に親しんだ）、19世の異様船の出没と欧米列強の開国要求へとつながる一連の歴史の流れの序奏として子どもたちの興味を引くようなかたちで描かれている（韓国教育開発院2001, p.56）。

姜在彦（1994）は「17世紀に西学を受容することができた機会は燕行使による北学の手段だけではなかった。もう一つの可能性は朝鮮に直接漂流した西洋人との接触であった」と述べ、そして、「ハメル一行が身に着けていた天文観測、航海術、大砲および鳥銃の製造と操縦法などは、そのいかなるものでも朝鮮の国防力強化と航海発展に貴重でないものはなかった。特に彼等のオランダ語を習い西洋事情を研究するということは、日本の蘭学に見るように西学受容に決定的意味を持って居たのである。」なのに、「ハメル一行の処遇を改善したり、国内の優秀な若者を選抜して西洋の言語と技術を会得させるための対策を提起したり、西洋事情を知るための努力をした為政者はいなかったように思われる」と残念がる。そして、朝鮮とは対照的に日本では1600年4月にオランダ船リーフデ号が豊後に漂着すると、徳川家康は英国人航海士ウィリアム・アダムス（日本名・三浦按針）とオランダ人ヤン・ヨーステン（耶楊子）を共に外交顧問として重用し、彼らを通じて西洋には旧教国と新教国とがあり、両者の間に対立があることを把握できたこと、貿易と布教を一体とする旧教国を退け、新教国に貿易のみを許すという巧妙な政策を採ったことを評価する。姜在彦（1996）も前著と同じく「大航海時代の先進技術者集団である彼等が朝鮮に残した痕跡は何もない……朝鮮王朝は1392年に創建されて以来、徹底した文治主義が貫徹されていた。その“文”とは儒のことである。彼等儒者たちは実学を雑学とって軽視し、技術（匠）を末技とって賤視していた。儒教一辺倒の為政者の眼は常に中華の北京に向けられ、南蛮によってもたらされた驚異的な西洋文明に向けられなかった。ハメル一行に対する対応はおのずから朝鮮儒教の思想的体質の問題につながる」と述べている。

尹基老（2005）の「西洋に対しての日本と朝鮮の対応の比較…シーボルトとハメルを手掛かりとして」で

も姜在彦の判断を踏襲している。この論文では題名に見るように、ハメルと朝鮮、シーボルトに対する日本の扱いを比較している。二人の人物は時代が異なり、入国のいきさつが異なるので、適切な比較とは言い難いが、論旨は誤ってはいない。ここでも、「ウェルテフレは朝鮮王朝にいくらか重用されていたが、ハメル一行への待遇は劣悪で、給与も滞るありさまだった。そのため、たびたび物乞いをして生活しなければならなかった。ハメル一行は朝鮮にとっていわば厄介者だったのであり、一行の持つ知識・技術はほとんど活かされなかった」と述べる。

一方、申東珪（2000）は「オランダ人漂流民と朝鮮の西洋式兵器の開発」という論文で違った考えを提起している。「姜在彦氏は朝鮮漂着オランダ人と朝鮮関係の位置づけとして、彼らが西洋のすぐれた技術を持った人々であったにもかかわらず、朝鮮にはその技術を伝習させるための対策を考えた為政者がただの一人もいなかったと評価する。その原因として朝鮮の文治主義や西洋文明の価値を認めようとしなかった儒教の思想的体質を上げている。しかし、その批判は当たらない。」と反論する。「当時朝鮮の為政者の頂点にあった孝宗は彼等の技術を利用していただけである」と述べる。しかし、この論文をよくみると、兵器開発に従事したのはウェルテフレであって、ハメル一行ではないことがわかる。当時の国王・孝宗は父・仁祖が清による侵攻を受けて屈辱的な屈辱を強いられた恨みを忘れず、北伐政策を計画し、このためには兵器開発が急務であった。明から伝わった紅夷砲の製造・操作等でオランダ人ウェルテフレの能力が活用されたとする。1655年3月15日、ハメルら一行のうちの二人が清国使節に直訴のため固く禁じられていた接触を試み捕縛され投獄された。この事件のため、ハメルら残りの全員も一時は処刑してしまおうか、との議論が行われたが、ハメルらを憐れんだ国王の弟・麟平大君と訓練都監の大將李浣の主張を入れて、遠隔地である全羅道に置くことになった。したがって、兵器開発の機会はなくなると指摘している。「朝鮮兵器開発にかかわっていたオランダ人はハメル一行ではなく、朴燕（ウェルテフレ）であるということである」と明言している。「朴燕の貢献も孝宗の没後、無用のことになった。孝宗の没後、軍備強化はもちろん、北伐政策そのものが顧みられなくなっていくからである」と、1659年の孝宗の没後は兵器開発が立ち消えになったとする。「オランダ人ウェルテフレは朝鮮漂着後、朝鮮の兵器開発と改良に大きな役割を果たしながら、朴燕

として朝鮮社会に同化していった。だからこそ、ハメル一行が漂着した当時…」ハメルらから日本へ送ってほしいと求められると、彼は「その要請を拒絶し、かえって彼等に朝鮮へ永住することを勧誘したのである。」と述べる。しかし、ハメル報告書（朝鮮幽囚記）を素直に読めば、「要請を拒絶して自分と同じように都へ行き訓練都監で働こう」と勧誘した、というより、朝鮮政府の方針で自分と同じようにハメルらがいくら要望しても国外へ出してもらえないことがわかっている。次善の生き方を教えている、と見るべきではないだろうか。

実際に朝鮮政府はハメルら一行を都の訓練都監に所属させウェルテフレのたどったコースを歩ませようとした。もし直訴事件がなかったら、ハメルら35人のその後は変わっていたかもしれない。朝鮮語が上達して、ウェルテフレと同じように、科擧の武科に合格して重く用いられる者が出たとも思える。武科は文科に比べれば大幅に低い扱いを受けた（宮島博史1995、姜在彦1992）が、武科及第者は文科と並んでいわゆる「両班」である。常民の上の士分になる。最近の新聞（東亜日報、2018/7/24）によると、壬辰倭乱（慶長の役）の15年後から科擧が廃止される1894年まで、武科及第者は12万1623人に達したという。武科は平民たちの身分上昇のための手段として活用された側面が強かったようだ。

ウェルテフレが兵器開発に従事したことを姜在彦（1996）も述べているので、両者の見解は必ずしも対立していないように見受けられる。

申東珪（2000）は論文の末尾において、「ところが、朝鮮は日本と違って、異国人登用によって得られた技術を発展させることができなかった。」として、その原因は国内の経済的悪化や北伐政策の沈滞もあるが、「中国は常に中華としての自負心を持っていて、国際関係の変化に対応することができなかった。朝鮮も明清交代期以後、自ら小中華となってしまったため中国とさほど変わらない態度をとることになった」と、指摘する。ここでいう「小中華」については説明を要するだろう。当時の朝鮮の為政者は自国を大明国の正統な後継者と自負し、満州族の支配下となった中国を夷狄と見なし学ぶものなしと自認していた（河宇鳳2000、p.128、河宇鳳2008、p.58、姜在彦2001、p.354）（清国から学ぶべきだと主張する「北学派」もいたが、主流ではなかった）。そのような頑なな為政者たちは西洋の文物を取り入れようとするはずはなかった。

李元淳（2002）は日韓学術交流セミナーにおける基

調講演として「韓国人の西欧対応の歴史的考察」と題する講演をおこなった。その中で18世紀の朝鮮儒学者たちの中で中国から伝わった多くの漢訳西洋書に基づき朝鮮西学が盛んになったことを取り上げた。そして「勿論、かかる出会いと学問的研究の前にも東洋貿易のために働いていた西洋船員たちが南海に漂着した記録が史籍に見えるが、彼等には歴史的事実としての“西欧”との出会いとしての特別の意味を見出すことはできない。ただの漂着人に過ぎない」と付け加えた。朝鮮日報2018/8/11によると李元淳ソウル大学名誉教授は韓国史教育の重鎮であったが前日に92歳で亡くなられた。ハメルらはただの漂着人に過ぎない、との同氏の見解は韓国歴史界の代表的見解といえよう。なお、西学は18世紀に盛んだったが、19世紀初頭に大弾圧が起こり漢訳西洋書を所持するだけの人々さえ官職剥奪の上に流刑に処せられたのだ（姜在彦1996, p.229, 尹姫珍2012, p.185, 李成茂2006, p.461, 孫承拮1993, p.81）。

IV ハメル報告書に見る朝鮮農業の一面

1660年、ヘンドリック・ハメルらは全羅道康津の全羅兵營で過ごしている。ハメルの記述では

「この年と翌年は雨が降らなかったため、穀物も他の作物も大変な凶作でした。1662年も新しい収穫があるまでそれが続き、何千人という人々が餓死しました。街道は追剥のため通行できなくなり、国王の命令によって旅行者の安全を保つために厳重に警備されました。それはまた道傍で餓死した人々を葬るためでもあり、また、毎日起こる殺人や強盗を防ぐためでした。いくつかの町や村が略奪され、国王の倉庫が破られて穀物が運び出されました。しかも、その犯人は罪人として捕らえることはありませんでした。というのは、それは大官の奴隷たちによって行われたからなのです。生き延びていた普通の人々の食料はどんぐり、松の樹皮および野草でした」

と記述している。彼等の仲間も11名が死亡し22名になっている。同じ頃の日本でも凶作は発生し、冷害で稲が育たないとか、風水害で農作物の不足の年に餓死者が発生したことがあった。ただ、水田耕作でいえば、日本の水田の方が灌漑設備は進み、ため池も作られて、雨不足に強いように見える^(注3)。今年の西日本の集中豪雨による水害に際して、「現在各地にあるため池の7割が江戸時代に作られたものだ」というニュースが流れた。朝鮮半島の水田は天水田（水を

降水にたよる水田）の割合が多かったようだ。李相潤ほか（2017）の示す資料によると、1917年の4つの主要河川の流域で数値は異なるものの天水田の割合は過半数を超えていて、日本統治時代になって急激に灌漑田が増加していることがわかる。米の大幅な増産が可能になった。かつては「5年に二作あるいは三作」と呼ばれるほど天候によって収穫が不安定だったという。朝鮮時代の儒学者たちが民生に有用な「利用厚生」に無関心だったことが指摘されている（姜在彦2001, p.330, 鄭章植2006, p.399-400）。第4代世宗が1429年に室町幕府に派遣した通信使・朴瑞生らが民生に役立つ技術の一つとして揚水水車を報告した（李明勲2010, p.53）が、これは普及せず、1764年の江戸期第11回の通信使も揚水水車の便利さを伝えた（金仁謙1999, p.248）がこのときも普及しなかったようだ。1894年に朝鮮に滞在し多方面の朝鮮情報を日本の新聞に伝えた本間九介は「朝鮮の山岳は赤土の露出した秃山で、樹木が無いために、少しの旱天（ひでり）でも水源が涸れ、田んぼに亀裂が入って、稲は赤みを帯び、百姓を悩ませているのである。我が国では高地の水田に灌漑するときは水車を用いる。旱魃のときにも、その便に頼ることが多い。しかし、かの国には水車がないため、少しずつ杓子で水をくみ上げる」と報告した。樹木を伐採したまま植林されていない保水力のない山、自力で動く水車が普及していないことも旱魃に弱い理由としてあげられている。

徐賢燮（2008）は1720年時点の朝鮮と日本の比較を行っている。「朝鮮王朝の歳入総額は50～70万石高に比べて徳川幕府のそれは日本全体の4分の1に当たる240万石高であると記録されている。近世の日本と朝鮮を単純に比べると日本は朝鮮の1.6倍の大きい国土に3倍多い人口に十倍以上の国力を持っていたと推算される」と述べている。また、河宇鳳（2008, p.347）は日本に漂着した朝鮮の漂流民が日本をどう見て居たかをまとめている。漂流民が官吏、僧侶、庶民と分けられているが、「大部分の漂流民は日本の文物が豊富であり、都市が繁栄していて経済的な面で朝鮮よりはるかに発展していると共通して見ていた。」と述べ、帰国した漂流民から日本で手厚く保護されたこと、日本人が豊かな生活をしていることを伝え聞いて漂流を偽装して日本へ行こうとした者までいた（河宇鳳はこれを「故漂」と呼ぶ）ことを記している^(注4)。

江戸期の朝鮮通信使も多くの記録で日本の都市の繁栄ぶり、庶民の生活が豊かであることを記している。17世紀のものを見ると、1624年の使行員・姜弘重

は「市場には物資が山のように積まれており、村里には穀物が広げられており、その百姓の富裕なことと物資の豊富なことは、わが国と比較にはならなかった」と述べ、1643年の著者未詳（1988）では「民間の富の力、国力が朝鮮とは及ぶべくもなかった」と記されている。

今回はヘンドリック・ハメルらの朝鮮漂着から脱出までの経過をたどり、関係する3つの問題について考察を行なった。次の機会にさらに他の問題について考察してみたい。

(注1) 朴延は朴燕、または朴淵と記す文献もあるが、いずれもオランダ人ウエルテフレである。また、彼と二人の仲間が上陸した地点を濟州島とするもの、慶州地方とするものなどがあり、どこであるかははっきりしていない。

(注2) 韓永愚ソウル大学名誉教授はその大著『韓国社会の歴史』において、「漂流して来たハメルがもたらした鳥銃の技術を導入して西洋式兵器を製造した（1656年）」と述べている（p.344）。ハメルら、としないで、ハメル一人を挙げるのはしっくりしない。続いて「北伐運動は、清の国勢が高まっていったため、時を得ることができないままにいた。1654年（孝宗5）清とロシアの国境衝突が勃発すると、清の要求に従って、数百名の鳥銃部隊を二度にわたって寧古塔（中国吉林省）に派遣した（1654、1658年）。これを羅禅征伐と言う。」と記述している。一回目の鳥銃部隊の出征はハメルがもたらしたとする鳥銃の技術を導入した西洋式兵器の製造よりも前ということになる。1592年に始まった文禄・慶長の役（壬申倭乱・丁酉再乱）に際して朝鮮軍は秀吉軍が大量に使用する鳥銃の威力に悩まされた。朝鮮に帰順した日本武士（降倭とか向化倭と呼ばれた）によって鳥銃と火薬の製造法が伝えられた（春名1993）。朝鮮の史籍に沙也可および金忠善として登場しているのがそれである。また江戸期第一回（1607年、慶長12年）の朝鮮通信使が駿府城で徳川家康に面会しその紹介状を得て、堺で500丁の鳥銃を購入し帰国した（鄭章植2006、p.23-25）という。それからすでに50年ほど経過したので、ハメルらが所持していたのはさらに性能が良いも

のだったのだろうか。

また、李玉パリ第七大学教授がクセジュ文庫のうちの一冊としてフランス語で『朝鮮史』を著し、漂着オランダ人たちに言及した。「(ウエルテフレの後) 24年後（1653年）、ヘンドリック・ハメルら約30人のやはりオランダ人が漂流し、自由の身となる（1666年）までの12年間、天文学、火薬・大砲の使い方についての新情報を提供した」と述べている（p.96）。こちらでは、1656年2月にハメルらが訓練都監から全羅兵營へ移されていることが考慮されていない。12年間情報を提供し続けたら、貢献度が高かったかのように見える。

申東珪（2000）は孝宗実録に残る

「新製の鳥銃を造る。是より先、蛮人の漂到するや、その鳥銃を得る。その制、甚だ巧み、訓局に倣いを命じて之を造らしむ」

との1656年（孝宗7年）7月の記述について、ハメルらの所持していた銃を模した銃の製造にはウエルテフレが関与していただろうが、ハメルらはこの時すでに都から全羅道へ移っていたから従事していないと主張している。

(注3) 国際灌漑排水委員会が日本の4施設を新たに「世界灌漑施設遺産」に指定したことが伝えられた（共同通信2018/8/14）。世界灌漑施設遺産とはインドのニューデリーに本部を置く国際灌漑排水委員会（ICID）が灌漑の歴史・発展を明らかにし、灌漑施設の適切な保全に資することを目的として、建設から100年以上経過し、灌漑農業に発展したもの、卓越した技術により建設したもの等、歴史的・技術的・社会的価値のある灌漑施設を登録・表彰するために2014年に創設した制度だという。登録されている灌漑施設遺産の約半数が日本国内の施設となっている。

(注4) これと関連して、ハメルらが見たところでは、当時の朝鮮の庶民の間で貨幣が流通していない様子を述べている。

「お互いの中での取引は、それぞれの価格に応ずる綿布を媒介にして行なわれます。大官と大商人は銀を媒介にして取引を行ないませんが、農民や貧しい人々は米やその他の穀物を媒介として行います」（ハメル、p.53）と記

し、実際に彼等は済州島に漂着の翌年、ソウルに連行され、訓練都監に配属されたとき、「一人一人に対して布2反を、一反はまずオランダ風に、もう一反をこの国の方法で着物に仕立てるため」に与えられ、「また必要なものを整えるためと衣服の仕立て代を支払うため」に布をさらに2反ずつ与えられたという (p.24)。

V 文献等

朝鮮史研究会 (1981) 『新・朝鮮史入門』 竜溪書舎
江越弘人 (2008) 『幕末の外交官森山栄之助』 弦書房
旗田巍 (2008) 『朝鮮史』 岩波書店
ヘンドリック・ハメル (生田滋・訳 1994) (原著は1669年) 『朝鮮幽囚記』 平凡社東洋文庫
春名徹 (1992) 「アジアにおける銃と砲」 荒野泰典他編著 『アジアのなかの日本VI文化と技術』 東京大学出版会 p.157-180.
本間九介著&C・W・A・スピルマン監修解説 (2016) 『朝鮮雑記・日本人が見た1894年の朝鮮』 祥伝社
尹基老 (2005) 「西洋に対しての日本と朝鮮の対応の比較－シーボルトとハメルを手掛かりとして」 県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要6, 293-303
尹姫珍 (2012) 『韓国の教科書に出てくる人物コリア史2 朝鮮王朝時代』 彩流社
徐賢燮 (2001) 『近代朝鮮の外交と国際法受容』 明石書店
徐賢燮 (2008) 『日韓の光と影・元韓国外交官の探訪記』 梓書院 p.201-202.
河宇鳳 (2008) 「十七・十八世紀韓国人の日本認識」 小島&スティール (編) 『鏡の中の日本と韓国』 ぺりかん社 p.117-140.
河宇鳳 (2008) 『朝鮮王朝の世界観と日本認識』 明石書店
梶村秀樹 (1979) 『朝鮮史・その発展』 講談社
韓永愚 (2003) 『韓国社会の歴史』 明石書店
韓国教育開発院 (三橋ひろ子ほか訳) (2001) 『わかりやすい韓国の歴史・国定韓国小学校社会科教科書』 明石書店
姜弘重 (若松実訳) (1988) 『東槎録・江戸時代第三次朝鮮通信使の記録』 日朝協会愛知県連合会
姜在彦 (1992) 『世界の都市の物語7 ソウル』 文芸春秋

姜在彦 (1994) 『西洋と朝鮮』 文芸春秋
姜在彦 (1996) 『朝鮮の西学史』 明石書店
姜在彦 (2001) 『朝鮮儒教の二千年』 明石書店
姜在彦 (2002) 『朝鮮通信使から見た日本』 明石書店
姜在彦 (2006) 『歴史物語・朝鮮半島』 朝日新聞社
姜在彦 (2008) 『西洋と朝鮮・異文化の出会いと格闘の歴史』 朝日新聞社
金学俊 (金容権・訳) (2014) 『西洋人の見た朝鮮－李朝末期の政治・社会・風俗』 山川出版社
金仁謙 (1999) 『日東壮遊歌』 平凡社東洋文庫
宮嶋博史 (1995) 『両班』 中央公論社
申東珪 (2000) 『近世東アジアにおける日・朝・蘭三国関係, オランダの東アジア貿易政策と朝鮮漂着オランダ人送還問題を中心に』 富士ゼロックス小林節太郎記念基金1999年研究助成論文
申東珪 (2000) 「オランダ人漂流民と朝鮮の西洋式兵器の開発」 史苑第61巻1号 立教大学 p.54-70.
申東珪 (2013) 「オランダ船の朝鮮漂着と日朝関係」 荒野泰典 (編) 『日本の対外関係5 地球的世界の成立』 吉川弘文館, p.316-328.
孫承拮 (1993) 「朝鮮の実学と西学」 荒野泰典ほか (編) 『アジアの中の日本IV文化と技術』 東京大学出版会 p.67-90.
武田幸男 (2000) 『朝鮮史』 山川出版社
鄭章植 (2006) 『使行録に見る朝鮮通信使の日本観－江戸時代の日朝関係－』 明石書店
李元淳 (2002) 「韓国人の西欧対応の歴史的考察」 日本大学総合科学研究所 『東アジア文化の西欧文化との交錯と変容・第4回日韓学術交流セミナー報告書』 p.13-23.
李玉 (金容権・訳) (2008) 『朝鮮史 増補新版』 白水社
李成市ほか編 (2017) 『朝鮮史1 先史～朝鮮王朝』 山川出版社
李相潤ほか (2017) 「韓国近代前期における河川灌漑田の利水安全度」 農業農村工学会論文集305号 p.1-115.
李明勲 (2010) 「2005年の文化人物李芸」 嶋村初音・編著 『玄界灘を越えた朝鮮外交官・李芸』 明石書店 p.21-78.
吉村昭 (1986) 『海の祭礼』 文芸春秋
著者未詳 (若松実訳) (1988) 『癸未東槎日記・江戸期第5次朝鮮通信使の記録』 日朝協会愛知県連合会